

# The *Little House* Books における Thomas Jeffersonの哲学

高 野 弘 子

## Thomas Jefferson's Philosophy in the *Little House* Books

Takano Hiroko

### Summary

The *Little House* books were written by Laura Ingalls Wilder in 1930s and 1940s. Wilder gave a speech at the book fair in Detroit in 1937. She said, "I wanted the children now to understand more about the beginnings of things, to know what is behind the things they see - what it is that made America as they know it."

In the *Little House* books, we can see Thomas Jefferson's philosophy. His philosophy is called Jeffersonian Democracy or Agrarian Democracy. In this paper I examined how Jefferson's philosophy was woven in the *Little House* books and the meaning of "what it is that made America as they know it."

In the series the agrarian tradition is described, for example, "Farmers are the only ones who are independent." The democracy is also described, for example, "Americans are free. That means they have to obey their consciences."

When the *Little House* books were published, it was the period of the Great Depression. American people suffered unemployment and poverty. At the same time there was the revival of Jefferson's philosophy. This tendency reflected on the *Little House* books.

Since they were first published, the *Little House* books have passed down to children Thomas Jefferson's philosophy, perpetuating the American spirit that shaped the nation as they know it.

### 1. はじめに

The *Little House* books は、Laura Ingalls Wilder (1867-1957) によって書かれた全8巻の児童文学である。ワイルダーがこの作品を出版したのは、1932年から1943年のことであ

り、彼女はすでに65歳から76歳という老齡期を迎えていた。この作品は、ワイルダー自身の子ども時代及び青春時代の記憶をもとに、西部開拓時代（1860年～1890年）真っ只中である1860年代から1880年代を生きた農民の日々の生活を描いている。

ワイルダーは、子ども時代を開拓農民の子どもとして過ごし、結婚後は開拓農民の妻として農業を営んでいた。しかし、44歳の時、鶏について書いた文章が農業新聞 *Missouri Ruralist* の編集長の注意を引き、1911年から同新聞の記者として文筆活動に携わることになる（Miller 114-15）。この頃、すでに娘の Rose Wilder Lane（1886-1968）は、*San Francisco Bulletin* 新聞のコラムを担当しており（Holtz 61）、ジャーナリストとして活躍していた。レインは、母親が農業以外からも収入を得られることを望み、自分の住むサンフランシスコに母を呼び、記事の書き方の手ほどきをしたり、自らの文壇の仲間と母親が交流する機会を設けたりした（Miller 122-23）。サンフランシスコでのこの経験の後、ワイルダーは、『ミズーリ・ルーラリスト』の定期コラムを担当するようになり、また、レインに原稿を見てもらいながら、他の新聞にも投稿していった。その後、ワイルダーは1924年に母 Caroline Ingalls（1839-1924）を、1928年には姉 Mary Ingalls（1865-1928）を相次いで亡くす。肉親の死に直面し、フロンティアの記憶が、やがて失われてしまうと感じたワイルダーは、それを文章として後世に残したいと考え始める。

1929年、アメリカは大恐慌に見舞われる。それまで、ジャーナリストとして活躍していたレインは、収入の多くを株に投資していた。また、両親にも投資を勧め、ワイルダー夫妻もいくらかの金額を投資に回していた。ところが、大恐慌により、株はただの紙切れとなってしまった。また、出版界にも大恐慌の波は押し寄せ、レインの収入は激減する。

（Holtz 202, 217-18, 220）自分の書いたものが売れなくなってしまったレインは、両親と自分の生活のために、子どもの頃よく話してくれた物語を本にしてはどうかと、ワイルダーに話を持ち掛ける。ワイルダーは、暖め続けていた自分の子ども時代の物語の執筆を始め、これが「小さな家」シリーズへと発展していった。（Miller 181）

「小さな家」シリーズは、最初にワイルダーが手書きの原稿を書き、レインがそれを編集し、タイプライターで打ち直した後、出版社に送るという流れで出版された。

（Miller 190）Holtz は、ワイルダーの手書きの原稿と、出版された作品とに大きな違いのある部分を指摘し（Holtz 379-85）、レインがワイルダーのゴーストライターであったと主張した（Holtz 379）。また、ワイルダーとレインの死後、レインの相続人である Roger MacBride は、レインの遺品の中に、未発表のワイルダーの手書き原稿を発見し、それを HarperCollins 社に持ち込んで、第9巻 *The First Four Years*（1971）として出版した。ワイルダーの手書き原稿がそのまま使われた第9巻は、レインが編集を手掛けた第1巻から第8巻までとは、雰囲気異なる作品となっていることから（Holtz 380）、レインが「小さな家」シリーズの編集に深く関わったことが明らかとなり、現在では、「小さな家」シリーズは、ワイルダーとレインの共作によって出来上がった作品であると考えられている（Fellman 2）。

ワイルダーは、第4巻 *On the Banks of Plum Creek* (1936) の出版記念として開かれた Detroit にある J. L. Hudson Department Store におけるブックフェアのスピーチで、「小さな家」シリーズの出版の意図について、「今の子どもたちに物事の始まりを理解してもらいたい。そして、今見ているものの背後にあること、つまり何がアメリカという国を作ったのかを知ってほしい」(Anderson 217 拙訳) と述べている。

「何がアメリカという国を作ったのか」とは、大きな問いである。筆者は、「小さな家」シリーズの中には、ワイルダーと共作者レインのアメリカ論が展開されているのではないかと考える。そして、それは、1776年7月4日、各植民地代表による大陸会議で採択されたアメリカ独立宣言の起草者である Thomas Jefferson (1743-1826) の哲学と関連があるのではないかと考える。彼の思想は、「ジェファソンの民主主義」(Jeffersonian Democracy) あるいは「農本民主主義」(Agrarian Democracy) と呼ばれており、農業を基盤とした民主主義理念である。本小論では、「小さな家」シリーズとジェファソンの哲学との関連を探っていきたい。

## 2. 「小さな家」シリーズの中に見られるジェファソンの哲学

筆者は、「小さな家」シリーズの中に、ジェファソンの哲学を見ることができると考える。「小さな家」シリーズにおいて、具体的にそれがどの様に織り込まれているかを見ていく。

### (1) 農本主義 (農民は神に選ばれた民である)

ジェファソンは『ヴァージニア覚え書』(1785) の質問19で、農民は神に選ばれた民であると述べ、その徳の高さを以下の様に讃えている。

もし神が選民をもつものとするれば、大地に働く人々こそ神の選民であって、神はこれらの人々の胸を、根源的で純粋な徳のための特別な寄託所として選んだのである。・・・耕作者の大部分が道徳的に腐敗するという現象は、いまだかつてどの時代にも、またどの国民の間にも実例のあったためしが無い。道徳の腐敗は、農民のように自分たちの生存のために天に頼り、自分の土地や勤勉に頼ることをしないで、自分の生存のために顧客の不慮の災害や気まぐれに依存しているような人々に捺された印なのである。・・・どの国家においても農民以外の市民階級の総計と農民の総計との比率は、その国の不健全な部分と健全な部分との比率なのであり、またそれは、その国の腐敗の程度を十分に測りうる絶好のバロメーターでもある。(297-98)

ジェファソンは、農業を基盤とした国づくりを目指した。そして、国を構成する人々が有徳であるためには、経済的にも精神的にも独立した人格を持っていなければならない、他人

に依存することなく、独立して生計を営むことができる農民こそがその担い手であると考えていた。(荒井109)これが農本主義思想である。

「小さな家」シリーズにおいて、このジェファソンの農本主義の哲学と重なる場面を、第2巻 *Farmer Boy* (1933) 及び第9巻 『はじめの4年間』に見ることができる。

①『農場の少年』

『農場の少年』は、「小さな家」シリーズの主人公であるローラの将来の夫となる Almanzo James Wilder (1857-1949) の子ども時代を描いた作品である。アルマンゾの父親は、ニューヨーク州北部にある Malone で、豊かな家族農場を営んでいる。鍛冶屋の Paddock がアルマンゾを徒弟にしてはどうかと、父親に申し出た時、農民についての彼の考えをアルマンゾに以下の様に示している。

A farmer depends on himself, and the land and the weather. If you're a farmer, you raise what you eat, you raise what you wear, and you keep warm with wood out of your own timber. You work hard, but you work as you please, and no man can tell you to go or come. You'll be free and independent, son, on a farm. (370)

すなわち、アルマンゾの父親によれば、パドックのような鍛冶屋になれば、天気は左右されずに生計を立てることができる。夜は家畜が寒さで凍えないかと心配する必要もなく、仕事場は屋根の下だから、雨が降ろうが、日差しが強かろうが、強風に吹かれようが、雪が降ろうが気にかける必要がない。また、鍛冶屋は十分な収入を得られ、豊かな食べ物と衣服を買うことができる。しかし、物事には、その反面がある。鍛冶屋は得るものすべてを他人に依存しなければならない。それに対して、農民が依存するのは、自分自身と土地と天候だけだ。農民は自分で食べるものを育て、着るものを作り、自分の材木で暖を取る。仕事はきつい、人に指図されることはなく、自分の思うように生きることができる。農場では自由で独立した人生を送ることができると考えている。つまり、自給自足の農民は、商工業者の様に買い手の都合や気まぐれに左右されて生計を立てる必要がなく、自分の人生を農場で自由にそして独立して生きることができると述べている。

また、母親は、アルマンゾの兄の Royal が、父親のような農民になるのではなく商人になりたいと言っていることに対して、以下の様に嘆いている。

Oh, it's bad enough to see Royal come down to being nothing but a storekeeper! Maybe he'll make money, but he'll never be the man you are. Truckling to other people for his living, all his days - He'll never be able to call his soul his own . . . I won't have Almanzo going the same way! (367)

商人になることを望んでいる兄のローヤルは、金銭的には恵まれるかもしれないが、生活

のために一生他人に媚びへつらうような人生を送ることになると、アルマンゾの母親は考えており、アルマンゾには父親の様に自分自身の主人であることのできる農夫になってほしいと願っている。従って、アルマンゾの両親は、共にアルマンゾが独立自営農民になることを望んでいることがわかる。

母親の心配をよそに、アルマンゾの心はもうすでに決まっていた。彼は、パドックが意地の悪い Thompson に対しても、幌馬車を買ってもらうために機嫌を取らなければならなかった姿を見ていた。そして、その姿と父親を比較して、“Father was free and independent; if he went out of his way to please anybody, it was because he wanted to”

(369). と考え、また、“Almanzo did not want to live inside walls and please people he didn't like, and never have horses and cows and fields. He wanted to be just like Father.”

(370-371) という夢を示している。つまり、9歳のアルマンゾは、口に出しては言わなかったが、もうすでに、父親のような農夫になることを心に決めている。『農場の少年』の最後の場面で、父親は、アルマンゾに、“You take your time, son. Think it over. You make up your mind what you want.” (371) と述べるのだが、これに対してアルマンゾは、

“Father! Can I? Can I really tell you what I want?” (371) と尋ね、父親が “Yes, son”

(371). と言うと、“I want a colt” (371). と答えている。アルマンゾの父親は、名馬を育てることでも有名な農民であり、アルマンゾの “I want a colt” (371). という答えは、子馬を育てる父親のような農夫になりたいという意思表示であった。

農業に対するアルマンゾの父親、母親、そしてアルマンゾ自身の考え方が、『農場の少年』の中で示されているが、これらに共通するのは、「民衆に真の独立と自由を確保するものは農業のほかにはない」(中屋『世界史大系11』133-34) というジェファソンの哲学との重なりである。

## ②『はじめの4年間』

9歳の少年だったアルマンゾが、後に主人公ローラと結婚するのだが、2人の最初の4年間の生活が、『はじめの4年間』に描かれている。この作品は、前述の通り、ワイルダー及び娘のレインの没後、原稿が発見され、1971年にハーパーコリンズ社から出版された。

この第9巻には、大人になったアルマンゾの農民に対する考え方が示されている。その部分は、結婚直前のローラがアルマンゾと交わす会話のやり取りから始まる。ローラは、農夫とは結婚したくないと、アルマンゾに切り出す。そして、町は発展しているから、他の仕事につくチャンスはいくらでもあると述べる。それに対して、アルマンゾは、なぜ農夫と結婚したくないのかと尋ねる。ローラは、農場での仕事は女性にはきついし、多くの仕事があるにもかかわらず、収入が少ないからだと答える。(4) 農業のもたらす苦労を正直に語るローラに、父親の後姿を見て育ったアルマンゾは、自分の考えを以下のように述べる。

Farmers are the only ones who are independent. How long would a merchant last if farmers didn't trade with him? . . . You see, on a farm it all depends on what a man is willing to do. If he is willing to work and give his attention to his farm, he can make more money than the men in town and all the time be his own boss. (5)

アルマンゾは、農業の知識や技術と共に、農業に対する考え方を父親から学び、それを受け継ぎ、独立自営の農民だけが、真に自分自身の主人になることができるのであると確信している。そして、ローラに3年の猶予を求め、もし3年以内に農業が軌道に乗らなければ、別の仕事に就くことを約束する。

この約束を受け入れたローラは、アルマンゾと共に農業を営みながら、馬を愛し、広大な大草原での自由を楽しむ。しかし、日照り続きや、雹が突然襲うなどの天候の影響を受け、3年たってもアルマンゾの農業が軌道に乗ることはなかった。ところが、ローラは、度重なる農業の困難にも、精神の高揚を覚えていた。それは、「もっと先へ行けば良いことがある」というパイオニアの祖先たちの心情と同じであり、祖先たちがさらに西へという空間を示したことに對して、彼女が抱いたのは時間という先であった。開拓農民の娘であるローラは、土地に対するアルマンゾの愛情を理解していた。そして、母親がよく言っていた “We'll always be farmers, for what is bred in the bone *will* [sic] come out in the flesh.” (133) という言葉を思い起こし、アルマンゾと共に農業を続ける決意をするのであった。

『農場の少年』と同様にこの『はじめの4年間』の中のエピソードも、ジェファソンが理想とした農本主義との関連を見ることができる。ジェファソンは、アメリカという国が、アルマンゾの父親やアルマンゾの様な農民によって構成されることを望んだ。

ジェファソンの農本主義の考え方は、『ヴァージニア覚え書』に留まらず、彼の書いた書簡の中にも多く見られる。ジェファソンは、独立宣言発布後の1785年、ジェイ・ジョイ（1745-1829 ニューヨーク市出身であり、有名なザ・フェデラリストの執筆者として憲法制定につくし、また外交官としてジェイ条約を結んだ人物）宛ての手紙の中で、彼の揺るぎない農本主義思想を以下の様に示している。

現在われわれには、無数の人民を耕作に従事させるのに十分な土地があります。大地を耕すものこそ、一番貴重な市民です。かれらはもっとも活気にみちた、もっとも独立心の強い、もっとも徳の高い人たちで、しかももっとも永続的な紐帯によって、祖国にしばりつけられ、祖国の自由と利害に結びつけられています。ですから、この大地の耕作という仕事がなくならないかぎりには、私はかれらを水夫とか職工とかそのほかのどんな職業にもかえさせたくありません。（バドーヴァー 77）

彼はまた、同年にホーゲンドルプ（詳細不詳）宛ての書簡に「我が国の全市民が農夫

であるべきです」(バドーヴァー 78)と書いており、アメリカ国民全員が農夫になることを望んでいたことが明記されている。ワイルダーが子ども時代を過ごしたフロンティアを有する西部では、ジェファソンが理想とする農本主義がまだ脈々と流れていた時代であった。

## (2) 民主主義 (自分自身の良心に従う自由)

明石は、「アメリカにおける民主主義の理念を表し、また、民主主義のルーツとして、もっとも頻繁に引用されるのが、アメリカ独立宣言である」(明石「アメリカの歴史」64)とジェファソンの起草した独立宣言を民主主義のルーツとしている。そして、以下の様に続けている。

ジェファソンは、農業が国の基幹産業となるような農業共和国を建設しようとした。・・・彼にとって、農民とは国民の中で最も勤勉、節約心、奉仕の精神に富んでいて、市民的美德の体现者である。農業を重視することは、これら市民的美德を有する農民を増加させ、その結果他の国民にも、この美德を広めるということである。ゆえに、ジェファソンは、道徳的観念でもって、民主主義を規定していた。(明石「アメリカの歴史」70-71)

「小さな家」シリーズにおいて、道徳観念で規定した民主主義を、第7巻 *Little Town on the Prairie* (1941) 及び第8巻 *These Happy Golden Years* (1943) に見ることができる。

『大草原の小さな町』では、主人公ローラが、独立記念日の祝いの際、以下の有名な一文を含む独立宣言文の朗読を聞いたことが示されている。

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain inalienable rights, that among these are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness ... (74)

児童文学に独立宣言の原文が引用されているのである。その引用は、上記引用部のみならず、48行3ページに渡っている。それに続いて、祝いに集まった人々が国歌を共に歌ったことが描かれ、独立宣言文の引用の後に、以下の歌詞が記載されている。

My country, 'tis of thee,  
Sweet land of liberty,  
Of thee I sing. ...

Long may our land be bright

With Freedom's holy light,  
Protect us by Thy might,  
Great God, our King! (75)

アメリカには複数の国歌があるが、この曲は、ボストンで開かれた独立記念日で初めて歌われた「アメリカ」という曲である。物語の中でローラは、独立宣言の朗読と、自国の名前のタイトルのついた国歌を聞いた後、今まで気づかなかった良心という考え方が思い浮かんだことを、以下の様に表現している。

God is America's king. She thought: Americans won't obey any king on earth. Americans are free. That means they have to obey their own consciences . . . I will have to make myself be good. Her whole mind seemed to be lighted up by that thought. This is what it means to be free. It means, you have to be good. (75-76)

ローラが、自分自身の良心に従うことこそ、アメリカ人に与えられた自由であることに気づいた場面である。Shimizuは、ジェファソンの哲学について、“Jefferson's theory of human nature posits two essential human endowments: reason and moral sense. He often refers to the former as 'the endowments of Head' and the latter as 'the endowments of Heart.' He also writes of 'the endowments of Heart' as conscience, or “the sense of right & wrong.” (“The meaning of Moral Sense in Thomas Jefferson's Political Thought” 68) と述べているが、『大草原の小さな町』の中で、このジェファソンの考えである conscience (76) が触れられているのである。

また、清水は、ジェファソンが甥のPeter Carr に宛てて書いた手紙（1787年8月10日付）の一部を取り上げ、「農夫と大学教授に道徳上の問題を提示してごらん下さい。農夫は教授と同じくらい巧みに、そしてしばしば教授よりももっと立派に問題を解決することでしょう。といいますのは、農夫は人為の諸規則によって道を踏み外してはいないからです」（「トマス・ジェファソンと道徳感覚」4）と紹介している。ジェファソンは「無学な農民を理性に秀でた大学教授よりも上位に置いた」（「トマス・ジェファソンと道徳感覚」4）のであり、言い換えると、理性より道徳性（conscience）を上位に置いたと言える。

『大草原の小さな町』において、独立宣言文にある「自由」とは、「自分自身の良心に従う自由」であるという、ジェファソンが意味した本来的な意味を、14歳であるローラの言葉を通して、子どもの読者にも分かりやすく伝えようとしている。「アメリカ精神を表すべく意図された」（柳生54）独立宣言を、それに対するローラの解釈と共にテキストの中に示し、ジェファソンの哲学に忠実に、また子どもの読者も理解できるように、易しい言葉に置き換えているのである。



また、『この楽しき日々』の中では、結婚式の少し前、ローラはアルマンゾに、式の最中に牧師に宣言する obey という言葉について、“Almanzo, I must ask you something. Do you want me to promise to obey you?” (269) と尋ねている。そして、“Well, I am not going to say I will obey you” (269). と彼女の意思を示し、“I cannot make a promise that I will not keep, and Almanzo, even if I tried, I do not think I could obey anybody against my better judgement” (269-270). と説明を加えている。独立記念日に自由の意味に気づいた4年後、18歳に成長したローラは、結婚に際して、どんな状況にあっても自分自身の良心に従うことを表明しているのである。

### 3. 「小さな家」シリーズの出版時の時代背景

「小さな家」シリーズ全8巻は、1932年から1943年にかけて出版されているが、この時代のアメリカはどのような時代であったのか。なぜ「小さな家」シリーズの中にジェファソンの哲学が織り込まれることになったのかのヒントを与えてくれるであろう出版当時の時代背景について確認する。

#### (1) 大恐慌

1929年に始まる世界大恐慌により、1930年代のアメリカは経済不況にあえいでいた。「小さな家」シリーズが出版されたのは、この大恐慌の時期と重なっている。

大恐慌の最中に、大統領として就任したのが、Franklin Delano Roosevelt (1882-1945)であった。彼は、国民に職と安全を約束することにより、選挙戦を勝ち取った。そして、次々と法律を作っていった。農業調整法 (The Agricultural Adjustment Act)、銀行法 (Banking Act)、連邦動力委員会 (Federal Power Commission)、公益事業持株会社法 (Public Utilities Holding Company Act)、公共事業促進局 (WPA)、全国区労働関係法 (National Labor Relations Act)、富裕税法 (Wealth Tax Act)、連邦作家計画 (Federal Writers' Project)、連邦芸術家法 (Federal Artists' Act) など、多数挙げることができる。

その政策について、明石は以下の様に説明している。

その具体的な政策としては、一つに、社会保障制度・老齢年金制度・失業保険制度を確立し、社会的弱者にも最低限の生活を保障すること、二番目に、政府が農業生産の作付け制限を行い、農産物の価格と他の物価を見比べながら、農産物の価格を引き上げ、農民に助成金を支払うこと、三番目には、団体交渉権・ストライキ権などを擁護して、労使関係の改善をはかって、労働者を保護することがとられた。それゆえ、1930年代とはアメリカが社会主義化した時代である。(明石「アメリカの歴史」76)

たとえば、農業について取り上げれば、農民の生活を保護するという大義名分のもと、農産物の過剰生産を避け、農産物価格を安定化させるという目的で、農民の農作物生産量を制限する代わりに、政府が補助金を払うといった方法が取られた。すなわち、農民の生活に政府が深く介入するようになっていった。中屋は、「ニューディールによって、アメリカ社会からは、建国以来の伝統であった自由放任思想が放棄され、これに代わって、政府権力による統制経済が当たり前のこととされるに至った」（『ローズヴェルトの時代 III』6）と述べている。従って、「小さな家」シリーズの出版時の時代背景は、様々な方面において、政府が国民生活に深く介入するようになっていった時代であったと言える。

### (2) New Deal に対するアルマンゾの反応

ニュー・ディール政策に対する Almanzo Wilder (1885-1949) の具体的な様子を示すエピソードを、Miller が紹介している。

ある日、ワイルダーの夫のアルマンゾが、モーガン馬と共に農作業をしていると、農務省の役人が近寄ってきて、農場経営についていくつかの質問をした。そして、法律により、2エーカー（約8000m<sup>2</sup>）以上のオート麦を栽培してはいけないとアルマンゾに告げた。これに対して、普段は穏やかな彼が、以下の様に役人に言い放ったというのである。

God damn you, you get to hell off my land and you do it now. I'll plant whatever I damn please on my own farm, and if you're on it when I get to my gun, by God I'll fill you with buckshot. (Miller 199)

この逸話は、レインが友人の Mark Sullivan に宛てた1938年8月16日付の手紙の中に書かれている。独立自営の精神のもとに農業を営んできたアルマンゾにとって、農務省の役人に、自分の農場で何をどのくらい作るかなどということについて指図されることに激怒したのは、当然のことと推察する。

### (3) ニュー・ディールに対するレインの反応

「小さな家」シリーズの共作者であるレインは、当時、ルーズベルト大統領の推進するニュー・ディール政策について、反対する立場であることを公に示していた。そして、出版社のエージェントである George Bye に“*I'd like you to understand why I'm a Jeffersonian Democrat, and will vote for anybody - Hoover, Harding, Al Capone - who will stop the New Deal.*” (Holtz 261) と書いた手紙を送っている。レインは、ジェファソン民主主義の支持者であることがここに表明されている。

また、レインはワイルダーが「小さな家」シリーズの最終巻である『この楽しい日々』を出版した同じ年に、彼女の政治信条を表現した著書 *Discovery of Freedom*

(1943) を発表している。その中に以下のような記述がある。

Nothing but your desire, your will, can generate and control your energy. You alone are responsible for your every act; no one else can be. This is the nature of human energy; individuals generate it, and control it. Each person is self-controlling, and therefore responsible for his acts. Every human being, *by his nature* [sic], is free. (xi-xii)

自分をコントロールし、自分の行いは自分が全責任を負うこと、それが、人間に与えられた自由であるとし、“It is a tough job to be free” (200). と自由であるということは、実は大変責任の重い仕事を与えられていることなのだと述べている。そして、“Each individual must act according to his own idea of Rightness [sic]” (75). と各自が自分自身の考える正義に基づいて行動する必要があることを、“Human energy is individual energy, controlled according to individuals’ beliefs” (125). の様に、正義を信念という言葉に言い換えながら、繰り返し述べている。この rightness や beliefs という言葉は、『大草原の小さな町』の中で、ローラが用いた consciences と同義に用いられていると考えられる。

また、レインは、“Government, as Jefferson said, is a necessary evil. It is evil because it is a use of force, and force has no morality and no moral effect.” (27-28) というジェファソンの政府に対する考え方も、*Discovery of Freedom* の中に紹介している。そして、“Authority does not control them *properly* [sic]” (140). と述べた後で、ドイツにおける Adolf Hitler (1889-1945) を例に、“A Nazi obeys Hitler because he believes that German Authority can make the kind of world he wants, or because he believes that he must obey” (225). と述べている。この obey という表現は、『この楽しい日々』の中でローラがアルマンズに、結婚式での誓いの言葉に obey を用いないことを頼んだことを彷彿させる。

#### (4) 大恐慌と「小さな家」シリーズ

佐藤は、大恐慌とジェファソンの哲学について、以下の様に述べている。

1929年に始まる大恐慌はアメリカ社会を根底から揺さぶり、失業と貧困は国民の精神すらも蝕んだ。対抗措置として講じられたニュー・ディールにより生産基盤の復興に留まらず、精神基盤の再構築も図られた。荒廃・消耗したアメリカン・デモクラシーの“巻き返し”である。『独立宣言』や世界初となる『信教自由法』を起草し、歴代大統領の中でも屈指の名声を誇るジェファソンはかかる精神の具現者とみなされたのであった。奇しくも生誕200年(1943年)を控えて、記念堂の建立が始まると共に、ジェファソンの思想や信条に関する研究とその伝播が社会現象となっていた(7)

「小さな家」シリーズの出版時の時代背景には、ニュー・ディール政策の下で、「アメリカが社会主義化し」（明石「アメリカの歴史」76）、「政府権力による統制経済が当たり前のこととされる」（中屋『ローズヴェルトの時代III』6）状況があった。これに対する「アメリカン・デモクラシーの“巻き返し”」（佐藤7）として、生誕200年を迎えるジェファソンの哲学へのリバイバルが、社会現象となって表れた時代であり、このことが「小さな家」シリーズにも反映したと考えられる。

#### 4. おわりに

本小論では、「小さな家」シリーズとジェファソンの哲学との関連を探ることをその目的としてきた。その結果、「小さな家」シリーズは、ジェファソンの哲学、具体的には、農本主義（大地に働く人々こそ神の選民である）と民主主義（自分自身の良心に従う自由）という2つの概念を包括していることがわかった。ホーフスタッターは、「ジェファソン派の思考においては、自営農業とアメリカ民主主義とが分かちがたく融合されるようになった」（25）と述べている。従って、ジェファソンの哲学において、農本主義と民主主義は融合した概念であり、それがまた「小さな家」シリーズにも反映していることがうかがわれる。

前に述べたとおり、ブックフェアのスピーチで、ワイルダーは「小さな家」シリーズの出版の意図について、「今の子どもたちに物事の始まりを理解してもらいたい。そして、今見ているものの背後にあること、つまり何がアメリカという国を作ったのかを知ってほしい」（Anderson 217 拙訳）と言っている。この部分について、磯部は、「アメリカのフロンティアの経験が物事のはじまりであり、物事の背後にあるものであり、今のアメリカを作ったものである」（磯部71）という解釈をしている。

しかし、中屋は「フロンティアの最も重要な影響は、アメリカ及びヨーロッパにおける民主主義の促進においてであった」（中屋『米国史研究入門』25）こと、また、「フロンティアは民主主義の成長の度をアメリカ全體として促進させたとはいえるが、その方向を左右したのでは決してなかった」（中屋『米国史研究入門』36）と指摘していることから、磯部の「アメリカのフロンティアの経験」をワイルダーの「何がアメリカという国を作ったのか」という問いの答えにすることは不十分であると考えられる。

ジェファソンは、アメリカ独立宣言の目的を、リチャード・ヘンリー・リーへの書簡で、「独自の原則や感情を目指したものでなく、以前書かれたどの著作から取られたものでなく、アメリカ人の精神を表現することを目的とした」（明石『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』200）と書いている。すなわち、「小さな家」シリーズに織り込まれているジェファソンの哲学とは、アメリカの精神であると言い換えることができる。なぜなら、「小さな家」シリーズは、西部開拓時代を生きた農民の物語であり、「フロンティアの存在そのものが、アメリカ精神の重大な支えでありつづけた」（加藤90-

91) からである。そして、「何がアメリカという国を作ったのか」という問いに対して、「小さな家」シリーズは、ジェファソンの哲学、すなわち「アメリカの精神がアメリカという国を作った」という答えを示していると考えられる。

今後は、ジェファソンの哲学及びFrederic Jackson Turner (1861-1932) のフロンティア学説と「小さな家」シリーズとの関連性について、アメリカの精神という観点から研究を続けていきたい。

(たかの ひろこ・本学経済学部非常勤講師)

#### 引用文献

- Anderson, William. ed. *A Little House Sampler: A Collection of Early Stories and Reminiscences*. U of Nebraska P, 1988.
- Fellman, Anita Clair. *Little House, Long Shadow: Laura Ingalls Wilder's Impact on American Culture*. Columbia, Missouri: U of Missouri P, 2008.
- Holtz, William. *The Ghost in the Little House: A Life of Rose Wilder Lane*. Columbia, Missouri: U of Missouri P, 1993.
- Lane, Rose Wilder. *The Discovery of Freedom: Man's Struggle Against Authority*. New York: John Day, 1943.
- Miller, John E. *Becoming Laura Ingalls Wilder: The Woman behind the Legend*. Columbia, Missouri: U of Missouri P, 1998.
- Shimizu, Tadashige. "The Meaning of Moral Sense in Thomas Jefferson's Political Thought." *The Japanese Journal of American Studies*, No. 6, 67-80. 1995. Print.
- Wilder, Laura Ingalls. *Farmer Boy*. 1933. New York: HarperCollins, 2004.
- . *Little Town on the Prairie*. 1941. New York: HarperCollins, 2004.
- . *The First Four Years*. 1971. New York: HarperCollins, 2004.
- . *These Happy Golden Years*. 1943. New York: HarperCollins, 2004.
- 荒このみ編『資料で読む アメリカ文化史2 独立から南北戦争まで 1770年代—1850年代』東京：東京大学出版会, 2005.
- 明石紀雄「アメリカの歴史—民主主義国家としてのアメリカの成長」中屋健一編、『アメリカ入門12講』東京：三省堂, 1982.
- 『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念—アメリカ合衆国建国史序説—』京都：ミネルヴァ書房, 1999.
- 加藤秀俊『アメリカ人：その文化と人間形成』東京：講談社, 1981.
- 磯部孝子『Laura Ingalls Wilder』名古屋：KTC中央出版, 2004.
- 佐藤圭一「T・ジェファソン：[教会と国家間の“分離の壁”原則]再考」東京：国土館大学政治研究3, 2012. 1-28. Print.
- 清水忠重「トマス・ジェファソンと道徳感覚」神戸：神戸女学院大学論集41, 1994. 3-23. Print.
- ジェファソン, T. 『ヴァージニア覚え書』中屋健一 訳. 東京：岩波書店, 1972.
- 中屋健一「監修者のことば」シュレジンガー, アーサー M. 『ロースヴェルトの時代III：大変動期の政治』佐々木専三郎訳 東京：ベリカン社, 1970. 5-6.
- 編『世界史大系 第11巻 アメリカ独立革命・フランス革命』東京：成文堂新光社, 1957.
- 『米国史研究入門』東京：光文堂, 1953.
- バドラー・ヴァー, ソール・K. 編『ジェファソンの民主主義思想』富田虎男訳. 東京：有信堂, 1961.
- ホーフスタッター, R. 『改革の時代：農民神話からニューディールへ』清水知久他訳. 東京：みすず書房, 1988.
- 柳生望『アメリカ思想の潮流—文明の展開の歴史』東京：毎日新聞社, 1988.